

演題番号 : 39

演題名 : 腹腔内の異常な膜様構造物による癒着を  
腹腔鏡にて確認できた犬の6例

発表者氏名 : ○鈴木宏隆<sup>1)</sup>、鈴木咲葉子<sup>1)</sup>、大堀文也<sup>1)</sup>、朴 永泰<sup>2)</sup>、横山貴之<sup>3)</sup>

発表者所属 : 1) 手形山すずき動物病院・秋田県、2) 自由が丘動物医療センター  
・東京都、3) ようきペットクリニック・広島県

1. はじめに：今回我々は若齢から中年齢の小型犬において、腹腔内臓器の広範囲な膜様構造物による癒着様変化を腹腔鏡下にて遭遇した。また6例中5例は子宮・卵巣摘出術の際に偶発的に遭遇した。また全症例で一般状態は良好で既往歴もなかった。そのため臨床症状が明らかではない当該症例に対し事前の検査で診断をすることが難しく、開腹下で気づき対応に苦慮する事態になると思われる。今回我々は当該症例に腹腔鏡下にて遭遇したため、その6例について概要を報告する。

2. 材料および方法：症例① T・プードル、7ヵ月齢、雌、既往歴なし、避妊手術希望で来院。腹部超音波検査にて肝周囲嚢胞を疑う液体貯留があった。嚢胞の精査及び避妊手術のため腹腔鏡を実施したが腹腔内の膜様構造物のため手術を中断した。症例② T・プードル、8ヵ月齢、雌、既往歴なし、避妊手術希望で来院。腹腔鏡下避妊手術を実施したが腹腔内の膜様構造物のため手術を中断した。症例③ T・プードル、6ヵ月齢、雌、既往歴なし、避妊手術希望で来院。腹腔鏡下避妊手術を実施したが膜様構造物が確認されたため開腹

下にて、避妊手術を行った。その際脾臓の形態的变化が認められたため脾臓摘出も行い、病理検査では漿膜の肥厚であった。症例④ T・プードル、8歳3ヵ月、避妊雌、既往歴なし、腹部超音波検査にて肝周囲嚢胞を疑う所見と脾臓の形態的变化を認めた。精査のため腹腔鏡検査を実施した。その際腹腔内の膜様構造物を確認し、その採材を行った。病理検査においては水腫性変化を示す非炎症性の腹膜組織であった。またシスト状に被囊した領域での液体貯留を認めたため切開を実施し、脾臓は温存した。症例⑤ T・プードル、7ヵ月齢、雌、既往歴なし、避妊手術希望で来院。腹腔鏡下での避妊手術を実施したが膜様構造物のため手術を中断した。症例⑥ T・プードル MIX、6ヵ月齢、雌、既往歴なし、避妊手術希望で来院。腹腔鏡下での避妊手術を行ったが腹腔内の癒着のため開腹にて手術を実施した。

3. 考察：本症例において事前の検査では確認できなかった腹腔内の膜様構造物が認められ、目的とする手術が困難であった。ヒトの報告では腹腔鏡下手術での腹腔内癒着が認められた38症例において開腹既往群が25例、炎症群は13例であっ

た。しかし本症例では既往歴及び臨床症状、各種検査にて上記の原因は認められず、これらの膜様構造物が腹腔内癒着である可能性は低いと考えられた。また犬で報告されている被覆性腹膜硬化症(EPS)と本症例は異常な膜様構造物の点で類似している。しかし被囊している組織はEPSの場合、炎症浸潤を伴う膠原繊維の膜であったと報告されているが、本症例では漿膜組織の線維増生と非炎症性の結合組織だった。また EPS は腸閉塞を示すこと

が多いが、本症例ではすべての症例が無症状であった。よって本症例は EPS と相違点が多く臨床的には区別されるべき病態であると考えられた。しかしこの膜様構造物について臨床的にも不明な点が多く、全例がトイプードルであったこと、2例で肝臓周囲に液体の貯留が認められたこと、2例で脾臓の形態的变化が認められたことなど疫学的、形態的变化も含めて今後も症例の蓄積を行い、病態のデータを分析していくことが重要と考えられた。